

ポスト構造主義を超えて

統一思想研究院 大谷明史

(三) ジャック・デリダ

(1) デリダの思想

① エクリチュールとパルマコン

プラトンの『パイドロス』(Phaedrus)には文字の発明の物語がある。そこには、書かれた言葉に関する、ソクラテスとパイドロスの次のような対話がある⁽¹⁾。

ソクラテスの言葉——「言葉というものは、ひとたび書きものにされると転々とめぐり巡り歩く」——に対してパイドロスは、「あなたの言われるのは、ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉のことですね。書かれた言葉は、これの影であると言ってしかるべきなのではないでしょうか」と問いかけ、ソクラテスは「まさしくそのとおりだ」と答える。ロゴスは、その背後に息子のために弁じ責任を取ってくれる父がいるから「正嫡子」と呼ばれる。父がいなくなれば、言葉はあやしげなミュトス(mythos)や「魂をもたない」記号になり、「転々とめぐり歩く」私生児になる、というのである。

「文字の発明」は便利であるが、それによって言葉が生命を失ったりする、つまり文字は薬にもなるが毒にもなるという二重性をもつという。プラトンはこの二重性に対し、「私生児」を排除しつつ、正しい「種」(親子関係、血筋)だけを残そうとしたのである。

このプラトンの『パイドロス』からヒントを得て、デリダは、話された言葉を意味するパロール(parole)と、書くこと、書く行為、また書かれたものを意味するエクリチュール(écriture)を対比して論じている。パロールは真正の言葉(ロゴス)であるのに対して、エクリチュールは頹落した言葉(ロゴス)であるという。すなわち「パロールは魂、内面性、記憶、生、現前、真理、本質、善、まじめ、父(法)との正常な関係に対応し、エクリチュールは物質、外面性、想起、死、不在、虚偽、見かけ、悪、ふまじめ、父(法)からの逸脱(私生児性)に対応する」⁽²⁾というのである。つまり「パロールにはそのテロス、目的論的な本質があり、真理、知識、生命に満たされた、充実したパロールがその理想となっているのである」⁽³⁾。

デリダは、以上のようなエクリチュール論を提起した。エクリチュールとは、パルマコン(pharmakon)、つまり治療薬でもあれば毒薬でもあり、治療薬に見えながらじつは毒薬なのだということ、これがデリダのエクリチュール論の本質である。

デリダによれば、至高の主体である神は書く必要がない。神は自己自身のうちで絶対的に充実しており、他者との関係を必要としない。王は書くことなく語る主体であって、自分の声をただ書きとらせるだけである。ソクラテスも何ひとつ書かず、ただプラトンにその声を書きとらせてただけであった。

しかるに言葉は書かれることによって、その真理性を失うという。デリダによれば、「エクリチュールこそ、哲学者を外部に連れ出す妙薬（パルマコン）であり、彼を本来の軌道から逸脱させる毒薬（パルマコン）なのだ」⁽⁴⁾。

デリダは言う。「書くこと（エクリチュール）はそのつど、消失、後退、抹消、巻上げ、消耗のようなものとしてあらわれてくる」⁽⁵⁾。デリダの狙いは、「書くこと」、「書かれたもの」、つまり「エクリチュール」をすべて粉碎することであった。つまり、すべての「エクリチュール」、すべての「テキスト」には、ある狙い——独特の形而上学的な前提——が隠れていることを証明し、粉碎しようとしたのである⁽⁶⁾。かくしてデリダは、書かれた思想の真理性をことごとく破壊しようとした。まさに「パルマコンの毒を世界中にばらまくデリダ！」と言われるゆえんである。

②脱構築

脱構築とは、読み手の側から、書かれたものにたいして、書き手の意図から離れて、新たな意味を構築することを言う。

『オックスフォード英語辞典』（1989年版）によれば、脱構築とは、

- (i) ある事物の構築を解体する行為。
- (ii) 哲学的小および文学的言語の間われないままになっている形而上学的前提や内的矛盾を暴露することに向けられている。

イギリス、サンダーランド大学教授のスチュアート・シム(Stuart Sim)によれば、脱構築の基本的前提となっているのは次の三つである⁽⁷⁾。

- (i) 言語は、意味の不安定さと確定不能性を深い刻印として抱えている。
- (ii) そのような不安定さと確定不能性がある以上、いかなる分析方法（哲学もしくは批評など）も、テキストの分析に関して権威を主張できない。
- (iii) それゆえ、解釈は自由な広がりをもつ行為となり、一般的に了解されている分析という作業よりも、ゲームに近い行為になる。

デリダの思想を紹介している本の中で説明されている、脱構築の性格を列挙すれば、次のようになる。

- a. ずらし、変形するもの

「それは、言語的、概念的、心理学的、テクスト的、美学的、歴史的、倫理的、社会的、政治的、そして、宗教的風景を激しく揺さぶり、ずらし、変形してしまおうとするものなのだ」⁽⁸⁾。

b. 寄生するもの

「脱構築にはどこか本質的に寄生的なところがある。デリダがこう述べているように、“脱構築とはつねに寄生についての言説である”」⁽⁹⁾。

c. 分裂、亀裂を生むもの

「一見したところ明白に単純な言明であったとしても、分裂ないし亀裂を免れられない。……“原子 [分割不可能なもの] など存在しない。”すべては分割可能である」⁽¹⁰⁾。

d. 決定不可能性を導入するもの

「脱構築は、……ロゴスの法のなかに決定不可能性を再導入することによって、決定不可能なものを経験のなかで別の決定がなされることを要求する」⁽¹¹⁾。

e. あらゆる規範を疑問に付すもの

「道徳や政治家から受け継いだあらゆる規範（コード）を疑問に付す、それが脱構築である」⁽¹²⁾。

f. 物事をあいまいにするもの

「無駄な言葉を饒舌に語りながら、物事をあいまいにする。それにもっとも適しているのが、脱構築の理論である」（——ピーター・レノン, Peter Lennon）⁽¹³⁾。

g. 本質を否定するもの

「脱 - 構築は……本体を現前せしめたいいくつかの力の由来をあらわにすることによって、その力の全面的な効力を失効させるという仕方で行われるのである」⁽¹⁴⁾。

脱構築は、このように破壊的、否定的なものである。ところが一方で脱構築にたいして、次のような弁解的な肯定的な主張もなされている。

a. 新たな「決定」の思想である

「脱構築はある意味で、新たな‘決定’の思想であるといえる。それは決定不可能性の思想であると同時に、決定の思想でもあり、同時に決定不可能性の思想でもあることこそ、脱構築をして新たな決定の思想たらしめているといえるだろう」⁽¹⁵⁾。

b. 脱構築は正義である

「もしも正義それ自体というようなものが、法の外あるいは法のかなたに存在するとしたら、それを脱構築することはできない。同様にまた、もしも脱構築それ自体というようなものが存在するとしたら、それを脱構築することはできない。脱構築は正義なのである」⁽¹⁶⁾。

c. 脱構築は愛である

「脱構築は、と彼は示唆する、‘愛なしには決して始まらない。’あるいは、より簡潔な言

い方をするなら、‘脱構築は愛である’⁽¹⁷⁾。

d. 脱構築は肯定的である

「ハイデガーの‘破壊’‘解体’、あるいは‘形而上学の克服’が単なる否定や批判ではなかったように、デリダの脱構築も否定的なものではない」⁽¹⁸⁾。

③ 差異（ズレ）

デリダによれば、これまでの哲学は誤っている。永遠の真理などというものはない。言語のうちに見出されるのは、「ズレ」や「差異」のシステムだけである。イギリスの哲学者、ポール・ストラザーン(Paul Strathern)によれば：

「事物の本質」に含まれている永遠の真理などというものを求めてきたのは間違いだ。そのような代物ではなく、自らが使う言語にこそ、目を向けねばならない。ではデリダの考えでは、言語とはどのようなものなのだろうか。言語は対象との本質的な関係など持ち合わせていない。自分自身によって示される概念とも本質的な関係を持ち合わせていない。言葉の意味はそのような関係から出てくるのではない。言語のうちに見出されるのは、「ズレ」や「差異」のシステムだけである。言葉の意味はこの「差異」から生まれてくるにすぎない」⁽¹⁹⁾。

デリダはさらに、差異だけが存在するのであって、「自分自身であり続ける」ような「肯定的な言葉」などありえないという。言語はつねに途方もない流動性のなかにあるというのである。

デリダの見解によれば、意思の疎通には必ずズレがついて回るものであり、言葉の意味は、最初の意味から絶えず変化してゆき、意味が完全にわかったという感覚はつねに先送りされていくもので、絶え間なく変化してゆくプロセスだとみるべきなのである。⁽²⁰⁾

④ 差延

デリダは、意味はつねに「違うものになる」ことを説明するのに、「差延」(différance)という名詞を持ち出した。差延とは、「異なる」という意味だけでなく、時間的に「遅らせる、遅延させる」という両方の意味を含む名詞としてデリダが新たに作ったものである。

そして「差延が指し示しているのは、‘原子など存在しない’という事実である。差延は、ある対象の名前ではない、現前することが可能であるような、何がしかの存在者の名前ではない。そして、そうであるからには、概念でもない」⁽²¹⁾のである。さらに、「差延の担い手 [エージェント]、著者、そして主人であるような主体は存在しない」⁽²²⁾というのである。つまり差延を導く主体はなく、差延は戯れているというのである。

東京大学の哲学教授、高橋哲哉によれば、「要するに差延とは、空間的差異であれ、時間的差異であれ、言語的差異であれ、非言語的差異であれ、空間/時間の差異であれ、言

語/非言語の差異であれ、ともあれ差異を生み出しつづける運動なのだ。……差異の戯れとは、もろもろの差異が抹消不可能かつ決定不可能な仕方、つぎつぎに生まれつづける運動である。⁽²³⁾ 結局、意味はつねに「違うものになり」、「先送りされる」のである。

⑤ 散種

デリダは言葉の意味が絶えず多様化していくことを示すために、「散種」(dissémination) という名詞を持ち出した。散種は「意味を撒き散らす」という意味である。デリダが示そうとしたのは、言葉はその正統的な由来と思われるものから離れて思わぬ方向に多様に延びてゆく力があるのを見てとることであった。つまり散種とは、哲学と呼ばれるものを不断に置き換えてゆくことにはかならない。それが「哲学の脱構築」であったのである。

⑥ 代補

「代補」(supplément)とは、何かに対してそれをさらに豊かにするために付け加えられるものであり、かつ、同時に単なる「超過分」として付加されるものでもある。デリダによれば、代補は並外れた感染力を持つウイルスのようなものである。デリダは言う。「ウイルスこそ私の著作の唯一の対象であったのだと言ってもいいのかもしれない」⁽²⁴⁾。

デリダにとっては、代補の論理以前には何もなく、「代補から起源へと遡ろうと願っても、起源に見出すのは代補なのである」⁽²⁵⁾。結局、「初めに代補があった」のである。つまり言葉の中には、初めから、ウイルスが宿っていたということである。

⑦ 形而上学の否定

形而上学は一般に、超感覚的な世界を真なる実在と考え、これを純粋な思考によって認識しようとする学問であり、神の存在、神の言葉(ロゴス)、目的論などをその特徴としている。

形而上学に対して戦いを挑んだのがヴィトゲンシュタインとデリダであった。二人とも、解決のための鍵は言語にあると考えた。けれども、その方法は異なっていた。ポール・ストラザーンは次のように語っている。

デリダは‘哲学の問題’を解決する際、言語を内部から破裂させるという単純な手段を用いた。言語の意味を爆発させ、無数の断片に引き裂こうとした。……他方、ヴィトゲンシュタインによれば、……言語の使用の誤りから、哲学というものが生じる。もつれた糸を解きほぐせば、誤りは消え去るはずである。哲学の問いには答えがないだけではない。そもそも、問われてはならないものなのである。……いわばヴィトゲンシュタインはシルクハットのなかのウサギを消したのに対し、デリダは無数のウサギをつくり出したのである⁽²⁶⁾。

デリダが目指していたのは、哲学（形而上学）に疑問を突きつけ、哲学を尋問することであったのであった。デリダにとっての「哲学」とは、通常の意味での哲学ではない。哲学に疑念を突きつけることこそ、デリダのいう「哲学」であった。

⑧ 絶対的真理の否定

18世紀、スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームが、すべての知識は経験、つまり知覚に基づくと訴えた。知識は経験に由来するという経験論を徹底的に突き詰めていけば、人間の客観的な知識は崩れ落ちてしまう。したがってヒュームによれば、絶対的な真理はあり得ず、知識は相対的なものにならざるを得ないのであった。

1931年、オーストリアの数学者クルト・ゲーデルが、数理論理学の手法を用いて、不完全性定理を打ち立て、数学が決して確実なものであり得ないことを証明した。それについて、デリダは「論理のプロセス全体」を無効なものにして、哲学が確実なものでないことを示そうとしたのであった。

⑨ 他者

高橋哲哉は、「脱構築はいつも、言語の〈他者〉に深くかかわっている。ロゴス中心主義の批判とは、何よりもまず〈他者〉の探求であり、〈言語の他者〉の探求なのだ」⁽²⁷⁾と言う。そして「他者の呼びかけへの応答としてのみ脱構築ははじまる」⁽²⁸⁾と言う。では、他者とは何であろうか。

サセックス大学の英語教授、ニコラス・ロイル(Nicholas Royle)は「デリダはつねに言語に先立つものや、言語を超え出るものに関心を持ってきた。しばしば彼はそれを‘力’と呼んでいる」⁽²⁹⁾と言う。デリダによれば、「力とは、それなしでは言語がそれであるところのものではありえなくなるような、そのような言語の他者なのである」⁽³⁰⁾。つまり言語に先立つ「力」が、言語の他者であるという。それは言語を背後から動かしている何ものかである。

そして未来において来るべき「全き他者」について、デリダは「神や人間、あるいはそのような星座におけるどの形象（主体、意識、無意識、自我、人間（男）ないし女、その他諸々）とも、もはや混同されることのできない全き他者」⁽³¹⁾であると言う。それはまさに「正体のなき者」である。

⑩ マルクス主義の影響

デリダは、原エクリチュールの「原暴力」、または「根源的暴力」に言及し、言葉は暴力であるという。これは「始めに言葉があった。言葉は暴力であった」ということである

デリダは言う。「言説が根源的に暴力的なら、言説はみずからに暴力を加えるほかはなく、自己を否定することによって自己を確立するほかはない」。それは「暴力に対抗する

暴力」である。言語における戦いとは、高橋哲哉が言うように、「形而上学的言説と脱構築的言説との戦い」と考えられる⁽³²⁾。デリダはさらに「言語はみずからのうちに戦いを認め、これを実行することによって際限なく正義のほうへむかっていくほかはない」⁽³³⁾と言う。これはまさに、言と言の闘争によって発展するという言語的な唯物弁証法である。

では、言語の暴力と言語をもって闘えという命令は、そもそもどこから来るのか、とさらに問いを進めている。暴力と闘え、暴力に抵抗せよという命令は、そもそもどこから来るのか？ デリダによれば、「全き他者」の侵入から来るのである。

言語には、外から（あるいは後から）偶然的な補足物として本体に付加されるものが、本体の内奥に侵入し、そこに棲みつき、それにとって代わってしまうという運動があるという。これは事物（正）の中には、事物を否定するもの（反）が生じて、その正と反の対立、闘争によって事物は発展するという、唯物弁証法と発想が同じである。

デリダはマルクス主義の誤りを指摘しながらも、「新しい文化、資本の、マルクスの著書と資本一般の両方について別の読み方と分析の仕方を発明するような文化の必要性」⁽³⁴⁾を訴えている。そして、マルクスの精神を生かしつづけることに意味があるとして、「新しいインターナショナル」を創設しようと呼びかけた。実際、彼の著書、『マルクスの亡霊』は「新しいインターナショナル」への新たな呼びかけであった。デリダは、まさにポスト構造主義のマルクス主義者なのである。

⑪ ダーウィニズムの影響

ダーウィニズムによれば、生物の種は固定されたものでなく、絶えず突然変異によって変化しているという。デリダは、それと同様に、言葉はたえず変化しているという。

デリダによれば、差異だけが存在するのであって、「自分自身であり続ける」という性質を持つ「肯定的な言葉」などまったくないというのである。言語はつねに途方もない流動性のなかにあるということに他ならないのである。

キリスト教の創造論によれば、神が生き物を種類にしたがって創造なさったのであり、生物の種は不変なものである。ところが、ダーウィニズムによれば、固定された種、永遠なる種などはあり得ない。デリダは、それと同様に、言葉にも同一性（アイデンティティ）はないと主張するのである。

デリダにとって、「アイデンティティの不調」なしのアイデンティティなど存在しない。デリダの関心は「あるひとつのアイデンティティが与えられたり、受け取られたり、あるいは到達されたりすることなど決してない。ただ、同一化の幻想の終わりなき、そして際限なきプロセスが持続するだけなのである」⁽³⁵⁾。「アイデンティファイ（同一化）することはつねに、付け加えること、つくろうこと、成り代わることの論理を伴っている」のであり、「私たちは（つねに）（いまだ）発明されるべきものなのだ」⁽³⁶⁾。人間は未だ進化の途上にあるというダーウィニズムの主張と同じである。

⑫ フロイト主義の影響

ニコラス・ロイルによれば、「デリダの論の運びは、フロイトのエクリチュールに対する深い賞賛と重要性に対する敬意によって突き動かされている」⁽³⁷⁾のであり、「『トーテムとタブー』からのあの一節は……デリダの‘ために’特別に書かれていた、あたかも彼がやってくるのを待っていて、彼がそれを指摘することを待っていたかのような、そんな興味深い、あるいはぞっとするような感覚を、つかのま私たちに抱かせるような、そういう契機のひとつである」⁽³⁸⁾のである。つまり、自己の思想形成において、デリダはフロイトを強く意識していたのであった。

⑬ 愛と性、そして死

デリダは、「愛なしには決してはじまらない」のであり、「脱構築は愛である」と言う。それについて、ニコラス・ロイルは、デリダにとっての愛はドラッグであり、「デリダのテキストが示唆するのは、魔に取り憑かれた心の論理、魔に取り憑かれた愛の、‘魔を愛する者’の仕事（作品）の論理である」と言う⁽³⁹⁾。

デリダは、死は愛の条件であるという。「私たちは、ただ、死すべき者だけを愛するし、私たちが愛する者の可死性〔死すべき定め〕は、愛にとって偶然的で外在的な何かなのではなく、むしろ、その条件なのだ」⁽⁴⁰⁾。デリダはまた、「愛は、死が私たちが分かたまで存在する」と言い、さらにデカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」に対抗して「私は喪に服する、それ故に私は存在する」と言う⁽⁴¹⁾。死のゆえに愛があり、死のゆえにわれわれの存在があるというのである。

⑭ メシアニズム

デリダは来るべきものとして「宗教なきメシア主義」を掲げる。それは「身分も、称号も……党も、国も、民族的共同体も、共通の市民権も、ひとつの階級への共通の帰属も、なしの」結びつきであり、「あらたなインターナショナル」である⁽⁴²⁾。

「宗教なきメシア主義」とは、「砂漠のメシアニズム」とか「絶望のメシアニズム」とも言われる。到来する他者が固定され、規定され、現前する存在者となることはけっしてないこと、それはつねに「来たるべきもの＝未来」であり、「約束」でありつづけることを意味しているからである。

(2) デリダへの批判と統一思想の見解

① エクリチュールとパルマコン

デリダによれば、話された言葉であるパロールは真正の言葉（ロゴス）、正嫡子であるのに対して、書かれた言葉であるエクリチュールは頹落した言葉（ロゴス）、私生児であるという。

確かに、話された言葉が一次的であり、書かれた言葉が二次的である。しかし前者が真

正の言葉、後者が頹落した言葉というのは誤りである。一般的に、話された言葉は曖昧である場合が多く、書かれた言葉はそれを論理的に整理したものであり、明瞭になっているのである。また話された言葉は、書かれなければ、消え去っていくしかないのである。

②脱構築

脱構築とは、読み手の側から、書かれたものにたいして、書き手の意図から離れて、新たな意味を構築することをいうというが、書かれたものがどんどん変化し、多様化していくわけではない。デリダは、脱構築によって、あたかも書かれたものがどんどん変質していくかのように語っているが、書かれたものは不変であり、著者の意図も不変である。読む人の解釈に多様性があるということにすぎないのである。

脱構築はまた、ずらし、変形し、かき乱し、曖昧にするものであるというが、一方で脱構築は、愛であり、正義であり、肯定的なものであるという。ずらし、変形し、かき乱し、曖昧にするという脱構築が、いかにして愛であり、正義であり、肯定的なものになりうるのであろうか。

これはマルクス主義の唯物弁証法が「対立物の統一と闘争によって発展する」と主張した論理と同様なものである。唯物弁証法の本質は「闘争によって発展する」ということであるが、闘争だけを言えば、人々に不安を与える恐れがあるので、あえて統一とか、平和を前面に持ってきたのである。それと同様に、脱構築は破壊の思想であると言えば、人々から受け入れられにくいので、脱構築は愛であり、正義であり、肯定的であるなどと弁解しているのである。しかし本質は、やはり破壊の思想である。マルクス主義は資本主義社会を破壊する思想であったが、デリダの脱構築は伝統的な哲学（形而上学）を破壊しようとする思想なのである。

③ 差異（ズレ）

デリダによれば、差異だけが存在するのであって、「自分自身であり続ける」（アイデンティティ）という性質を持つ「肯定的な言葉」などまったくないという。

しかし、ポール・ストラザーンが言うように、「もし同一的なもの、つまりアイデンティティがなければ、概念も存在しない。様々なものをまとめ同一化する概念など、まったく考えられ得なくなる」⁽⁴³⁾のである。

言葉の意味は「差異」から生まれてくるというが、言葉の意味は「差異」から生まれてくるのではない。言葉の意味は「差異」—相対関係—を通じて現れるのである。統一思想の表現で言えば、目的を中心とした、概念と概念、命題と命題の授受作用を通じて、意味が表現されるのである。

④ 差延

デリダは、意味はつねに「違うものになる」ことを説明するのに、差延という名詞を持

ち出した。そして差延の戯れにより、意味はつねに「違うものになり」、「先送りされる」という。

差延の戯れとは、ダーウィニズムにおける突然変異に相当するものと言えよう。ダーウィニズムによれば、生物の種は突然変異によって絶えず変化していくのであり、不変なる種はありえない。しかし突然変異は種を変化させるようなものではなかった。種の中での微小な変異にすぎないのである。それと同様に、差延によって、意味がたえず「違うものになる」ということはない。言葉に方言があるように、表現や発音に多様な変化はあるとしても、意味は基本的に不変なのである。

⑤ 散種

デリダは言葉の意味が絶えず多様化していくことを示すために、「散種」という名詞を持ち出した。これも差延と同様、ダーウィニズムの突然変異の発想と同じである。しかし、突然変異によって種の形質が一部変化するとしても、種そのものは不変であるように、言葉の意味が絶えず多様化していくとしても、基本となる意味は不変であり、アイデンティティを保持しているのである。

⑥ 代補

代補とは、何かに対してそれをさらに豊かにするために付け加えられるものであるが、それは並外れた感染力を持つウイルスのようなものであるという。そして言葉の中には、初めから、ウイルスが宿っていたというのである。

これもダーウィニズムの突然変異の発想と軌を一にしている。すなわち宇宙線、紫外線、稲妻などによって、遺伝子の組み換えが行われるが、その際、ある生物の DNA に、外から他の遺伝子のかげらが注入されることに相当するものである。しかし自然界において、遺伝子の組み換えが起きても、種が別の種に変わるようなことはない。それと同様に、代補によって、テキストの意味がどんどん変わっていく、というようなことはありえないのである。

⑦ 形而上学の否定

形而上学は神の存在、神の言葉（ロゴス）、目的論などをその特徴としているが、デリダはそれをことごとく粉碎しようというのである。

このような形而上学否定のスピリットはマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義に共通するものである。統一思想はマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義を批判、克服し、神の实在、神のロゴスによる創造、創造目的を明らかにしてきた。言語学的なマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義ともいべきデリダの思想も、マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の崩壊とともに、崩壊していくことであろう。

⑧ 絶対的真理の否定

デリダは、絶対的な真理はあり得ず、哲学は確実なものでないと主張した。しかしデリダのそのような主張にもかかわらず、普遍的、絶対的な真理は実在するのである。

伝統的なキリスト教、仏教、儒教、イスラム教などが説いた徳目（規範）は本質的に共通なものであり、時代を超えて普遍的、絶対的なものである。

ポール・ストラザーンは、数学や科学の知識は普遍的、絶対的なものであると言い、次のようにデリダに反論している。「とはいえ、バークリーやヒュームからの攻撃があっても、結局、数学や科学は生き延びた。ゲーデルから刃を突きつけられても、数学も科学も活動を続けている。これは何を意味しているのだろうか」⁽⁴⁴⁾。実際、われわれは三角形の内角の和が180度であることを疑わないのである。

⑨ 他者

デリダによれば、言語に先立つ「力」、それなしでは言語がそれであるところのものではありえなくなるような「力」が、言語の他者であるという。しかしそれは、アイデンティティのないものであり、「正体のなき者」、「全き他者」であるという。それは何であろうか。それは無であり、混沌とも言うべきものであろう。それが言語を背後から動かしているというのである。ちょうど自然選択が生物を支配しているように。

⑩ マルクス主義の影響

マルクス主義は、事物は闘争によって発展すると主張し、発展のためには暴力が必要である、そして人類歴史は支配階級と被支配階級との階級闘争の歴史であるという。デリダによれば、「始めに言葉があった。言葉は暴力であった」のであり、哲学の歴史は「形而上学的言説と脱構築的言説との戦いであった」という。

デリダは、言葉は暴力であるというが、そうではない。言葉は愛の理想世界を作るためのものであった。すなわち「始めに言葉があった。言葉は愛であった」のである。そして人類歴史は、神を中心とした善なる言葉と、サタンを中心とした悪なる言葉の戦いであったのである。

⑪ ダーウィニズムの影響

すでに見てきたように、デリダの思想は、生物はたえず変化し、多様化していくというダーウィニズムに類似したものである。デリダの思想は、まさに言語的進化論とすべきものである。生物の種が突然変異と自然選択によって進化するというダーウィニズムが誤りであるように、差異（ズレ）、差延、散種、代補、そして脱構築によって、言葉の意味がどんどん変わっていくというデリダの主張は誤りである。

⑫フロイト主義の影響

ニコラス・ロイルが述べているように、デリダの思想にはフロイトの影響もあった。統一思想はフロイト主義に対する批判と克服をなしているので、ここでは省略することにする。

⑬ 愛と性、そして死

デリダにとって、脱構築は愛であり、その愛は「魔に取り憑かれた愛」であるという。それはまさにサタンの愛であり、真の愛ではあり得ない。

デリダは、また死は愛の条件であるというが、そうではない。人間は本来、愛の完成とともに、蝶がさなぎから脱皮するように、古くなった肉身を捨てて霊界で永存するのであって、死は愛の完成を意味するものである。

デリダはまた、「愛は、死が私たちが分かちまで存在する」、「私は喪に服する、それ故に私は存在する」と言うが、「愛は、死を超えて存在する」「私は愛する、それ故に私は存在する」と言うべきである。

デリダはさらに「贈与」(don)について、「その極限においては、贈与としての贈与は、贈与として現れてはならない。贈与される者にとっても、贈与する者にとっても、である」と言う⁽⁴⁵⁾。これは、与えても、与えたことを忘れる真の愛に通じるものである。また「節度を持ち、尺度を持っているような贈与は、贈与ではない」⁽⁴⁶⁾と言うが、これは、計算づくの愛ではいけないということであり、やはり真の愛に通じるものである。デリダには、サタンの愛と真の愛が共存していると言えよう。

⑭ メシアニズム

デリダは来るべきものとして「宗教なきメシア主義」を掲げる。「宗教なきメシア主義」とは、「砂漠のメシアニズム」とか「絶望のメシアニズム」とも言われる。それは人類を希望のカナンの地に導くものではなく、絶望の砂漠に導くものである。統一思想は人類を希望のカナンの地に導く、真なるメシアを待望する「希望のメシアニズム」を掲げているのである。

註

- (1) 上利博規『デリダ』清水書院、2001年、86頁。
- (2) 高橋哲哉『デリダ』講談社、2003年、75頁。
- (3) 同上、73頁。
- (4) 同上、63頁。
- (5) ポール・ストラザーン、浅見昇吾訳『90分でわかるデリダ』青山出版社、2002年、77-78頁。
- (6) 同上、36頁。
- (7) スチュアート・シム、小泉朝子訳『デリダと歴史の終わり』岩波書店、2006年、33

頁。

- (8) ニコラス・ロイル、田崎英明訳『ジャック・デリダ』青土社、2006年、57頁。
- (9) 同上、205頁。
- (10) 同上、56頁。
- (11) 高橋哲哉『デリダ』245頁。
- (12) ポール・ストラザーン『90分でわかるデリダ』93頁。
- (13) 同上、110頁。
- (14) 斎藤慶典『デリダ：なぜ「脱一構築」は正義なのか』NHK出版、2006年、55頁。
- (15) 高橋哲哉『デリダ』119頁。
- (16) 同上、189頁。
- (17) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』266頁。
- (18) 上利博規『デリダ』77頁。
- (19) ポール・ストラザーン『90分でわかるデリダ』40-41頁。
- (20) スチュアート・シム『デリダと歴史の終わり』38頁。
- (21) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』148頁。
- (22) 同上、148頁。
- (23) 高橋哲哉『デリダ』104頁。
- (24) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』101頁。
- (25) 同上、102頁。
- (26) ポール・ストラザーン『90分でわかるデリダ』81頁。
- (27) 高橋哲哉『デリダ』159頁。
- (28) 同上、202頁。
- (29) コラス・ロイル『ジャック・デリダ』123頁。
- (30) 同上。
- (31) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』305頁。
- (32) 高橋哲哉『デリダ』136-37頁。
- (33) 同上、140頁。
- (34) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』92頁。
- (35) 同上、118頁。
- (36) 同上、119頁。
- (37) 同上、190頁。
- (38) 同上、191頁。
- (39) 同上、266-68頁。
- (40) 同上、299頁。
- (41) 同上、300頁。
- (42) 同上、248頁。

- (43) ポール・ストラザーン『90分でわかるデリダ』51頁。
- (44) 同上、47頁。
- (45) ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』272頁。
- (46) 同上、278頁。